

題，そして，それぞれが頭をかかえてしまうような問題のため，市行政の重点でもあり，常に市民の協力と理解を求められるものでもある。福祉開発，社会開発の言葉の示すように，生活環境については行政上やり過ぎるということがないという特性があるところからも，市民の苦情をまつまでもなく，開発的態度をもって事の処理に当たってもらいたいと思うし，その意味からも，生活環境の項には市のこれについての方針，対策といったものを示されることが，仮に白書としての体裁を欠くという批判を浴びても必要であったと感ずるのである。

ともあれ，問題提起的意義からこの白書の刊行を高く評価したい。そして，首都圏構想や広域行政圏の構想などにも素直に耳を傾け，巨視的に市民の幸福，市民の福祉を対策とした白書に成長することを期待したい。

(横浜市立大学教授)

その 2

片手落ちな工業化の評価

小島 康雄

市民生活白書を読んで，まず感じた点は，横浜市の生活環境については高度成長期における横浜の産業構造の変化にともなって，市民生活が公害，交通難等の犠牲になりつつあることを知らされたことである。しかし，これらについては，もつと視野を大きく見つめて，日本全体から見た横浜という点を考えてみるべきではないか。

横浜の歴史は，安政元年ペリーと神奈川条約を結んで以来，貿易港として発展し，百年の長きに及んでおり，港なくしての横浜，そして港なくしての工業の発展というものは考えられないであろう。そして，34年度から始まった根岸湾の埋立事業も，立地条件の有利さが幸いして，大企業の工場誘致に成功し，工業都市へと脱皮しえたのではないか。これに伴ない，関連企業である地元，中小企業にまでその恩恵が徐々に滲透し，第三次産業の伸びも次第に上昇していくのではないかと考える。もし，横浜市が工業都市として発展していかなければどうであろう。鉱業資源もなく，第一次産業等の発展の余地のない横浜において，何ができるであろう。

われわれ横浜市民は，公害もなく，交通難もない九州のはずれの都市や，また東北の低開発地域のような生活を望んでいるのか。また，米国や西欧諸都市のような高度の経済高度の文化生活を望んでいるのか。どちらかといえば大多数の人が後者を取るのではないかと考えられる。そしてこの立地条件を生かすことによって，工業都市として発展させていくことは，今年より貿易の自由化，開放経済への移行に伴い，日本経済が世界の企業と競争しなければならぬ時点において必要なことである。すなわち，如何に生産「コスト」を安くするかは，わが国のように加工貿易に依存度の高い国においては，横浜のような立地条件のよい土地へ重点的に投資をしなければ，世界経済の進歩についていけなくなるの

ではないか。工場誘致により得られた税収入をもって、重点的に公害対策、道路交通の整備を行ない市民のための住みよい都市を作るべきである。

人口の増加については、東京都心に近い横浜は、どうしても東京の「ベッドタウン」化されざるをえない環境に置かれている。そして、東京の土地より横浜の土地が安いこともこれに拍車をかけている。さらに、工場を誘致したことにより、その度合が著しくなったと考える。しかしながら、人口の増加に伴う土地の値上りにより、横浜市民としてはそれだけ資産がふえ、また、第三次産業の面でも人口の増加により、除々に売上げが増加していくのではないかとと思われる。人口の増加に伴ない、下水及び水道の施設の整備、清掃施設等の立ちおくれが問題になってくると思うが、今から10～20年さきの横浜の発展を計算に入れ計画したならば住みよい横浜になることも可能ではないか。

次に、我々がこうしたら横浜がもっと発展するであろう、という点をのべてみたい。

現在、高島町の交差点は非常に混雑している。これは、高島町から桜木町の手海側をしめしている三菱日本重工横浜造船所があるからで、これを、今後行なはれる本牧の埋立地へ移し、ここに「パース」を作ることは両者にとってともに良いのではないか。日本重工としては現在の場所での発展の余地がない。したがって横浜市としては、これを移転することにより「パース」を作り、高島町から国電の手海側に新たに道路を作ったならば、高島町交差点の混雑も緩和されるであろう。

根岸、本牧の埋立に伴ない、今後、工業用水の不足という事が問題となって来ると思う。これについての対策はどうか。これには近代的な下水処理場が本牧に出来た。そこでこの浄化された水を処理する事により工業用水に使えば、工業用水の問題は解決するのではないか。そして、今後中区だけでなく、横浜全市の下水処理場の水を工業用水に還元すべきである。現に英国では、この方法により工業用水を確保しているようである。以上二つばかり、我々がこうしたらよりよい横浜になるのではないかという点を書いて見た。

最後に、この市民生活白書とくに、総論を読んで感じたことは、一口に言って、市民生活白書らしからぬ白書である。白書とは政府が発表する実状報告書であって、この白書には筆者の主観が入り過ぎている感じがする。そして、横浜の現状の悪い面を強調し過ぎているようである。

市民の声に耳を傾けることは、非常はよい事ではあるが、しかし、この市民の声というのは、一つの苦情に過ぎない場合もある。その個人的な苦情にいちいち耳を傾けていたならば、いくつ耳があっても足りないのではないか。要は、世界における日本の立場、日本における横浜市のありかたを広い視野をもって、横浜市の将来の経済状勢に「マッチ」した横浜市政を立案すべきではないか。

(横浜青年会議所理事長)